

キリストが与える平安

ヨハネ 14:27

1)心の平安はどこに

今年も後半、残すところあと2カ月もありません。コロナ禍が長く続き、ウクライナとロシアとの戦争がまだ終わらないというものの全般的に考えると日本に住んでいる私たちはそれなりに平和な時代あるいは平安な日々を過ごしているように思うのです。ところが、そうは言うものの多くの場合、人の心は休まることがなく、満足することはありません。もっと持っていなければ、もっと力が無ければ、もっとテストの点が良くなければ、もっと、もっとと心が駆り立てられるのが現在社会です。

平穏で必要が満たされているからといって人の心は自動的に「平安」であるとはかぎりません。持っていれば失ってしまうことの不安があります。持っていないとこれでやってゆけるのかという不安があります。何もかも恵まれているのに、それでもいつも不安と恐れの中に生きている人もあります。一般的に心の病は、物質的に貧しい国よりも、豊かな国に多いと言われます。どのようにすれば本当の平安を得られるのでしょうか？ そのことについて今日は聖書から見てゆきたいと思います。

2) イエスも不安を体験された

今朝の聖書の言葉は、イエス・キリストが弟子たちに語られた言葉です。「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」イエスがこう言われたのは、最後の晚餐を終えてゲツセマネの園に向かうときでした。イエスは、そのゲツセマネの園で捕まえられ、翌日には十字架にかけられるのですが、弟子たちは、何かただならないことが起こることを感じとって、不安の中にありました。イエスは弟子たちに「心を騒がせるな」と言われましたが、弟子たちは、まさに、「心を騒がせて」いたのです。

皆さんは、不安や心配、恐れの中にあるとき、「心配するな」、「恐れるな」と言われて、「心配するのをやめよう」、「恐れるのをやめよう」と考えを切り替えることができますか。おそらくできないでしょう。

「心配するな」と言われても、心配がつのり、「恐れるな」と言われても、もっと恐れを感じるのが普通です。しかし、「心配するな」とあなたに言ってくれる人が、あなたの心配をよく分かってくれている人なら、「恐れるな」と言ってくれる人が、あなたの感じている恐れに共感してくれる人なら、つまり信頼関係のある人がそんな言葉を言ってくれるのであればきっと励まされることでしょう。

イエスは、弟子たちに「心を騒がせるな」と言われましたが、それは弟子たちの不安を何も知らないで言われたものではありません。この時、イエス自身も、ご自分の最期の時が近づいていることを知って、「心を騒がして」おられたのです。時々、イエス様は神様だから冷静で心など騒がしておられなかったのではという人がいます。それは違います。イエス様が心騒がせられるということに対してどのように感じておられるのでしょうか？

「心を騒がせる」という言葉は、イエスについて、何度も使われています。最初はヨハネ 11:33 です。イエスは、親友ラザロが亡くなったとき、ベタニヤの町に、ラザロの姉妹たち、マルタとマリヤを訪ねました。そして、そこでマルタとマリヤ、また多くの人々がラザロの死を嘆き悲しんでいるのを見ました。そのとき、イエスは「憤りを覚え、心を騒がせて」とあります。イエスはご自分の友ラザロの死をいたみ、涙を流し、ラザロの死に、もうすぐやってくるご自分の死を重ねあわせて、「心を騒がせた」のです。

次に、ヨハネ 12:27 では、イエスご自身が「今わたしの心は騒いでいる。」とおっしゃいました。イエスが十字架にかけられる数日前のことです。すぐそこに十字架の死が待っている、そのことを思って、イエスは「心を騒がせ」たのです。「得体の知れないものに心を騒がせる私たち」と「得体の知れているものに心を騒がせる主イエス」とも言えるでしょう。

さらに、ヨハネ 13:21にも同じ言葉が使われています。最後の晩餐の席でイエスがユダの裏切りを予告されたときの事です。「イエスは、これらのことを話されたとき、心が騒いだ。そして証しされた。『まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。』」とあります。ご自分が選んだ十二弟子のひとりが裏切ろうとしているのです。イエスの心が騒がないはずがありません。

このようにイエスは、ご自身が「心を騒がせた」お方なので、わたしたちの不安や恐れを分かってくださるのです。イエスはそれを知識としてではなく、体験として知っておられ、「わたしの心も騒いだことがあるのだ」と言って、わたしたちの騒ぐ心を理解してくださるのです。

第一コリント 10:13に「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」とあります。「人の知らないものではない」とあります。この「人」という言葉は、誰でも皆と、人間一般を指しますが、この「人」を「イエス・キリスト」に置き換えても意味が通じます。「あなたがたの経験した試練で、イエス・キリストの知らないものはない。」これは真実です。イエス様の知らない苦しみはありません。わたしたちが「心を騒がせる」どんな苦しみもイエスはすでに経験してくださっています。孤独も、誤解も、中傷も、裏切りさえもイエスは体験されたのです。イエスは、わたしたちのどんな苦しみも知っておられるのです。ですから、わたしたちは「心が騒ぐ」とき、イエスのもとに行くのです。行って、そこで解決と平安をいただくのです。イエスは「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」マタイ 11:28と言われているのです。私たちは救われるためには何か大きな行いをする必要はありません。しかし、イエス様の前に出て悔い改めることが最も重要なことです。それはこの場で出来ることです。

3) キリストが与える平安

しかし、イエスは神の御子なのに、どうして「心を騒がせた」のでしょうか。神の御子なら、たとえ、十字架刑が待っていても、雄々しくそれに耐えることができたのではないのでしょうか。たしかに、イエスに襲いかかろうとしているものが、たんなる迫害や苦難だけなら、イエスは、こうも心を騒がせることはありませんでした。しかし、イエスが直面しておられたのは、罪と死の力そのものでした。

現代の人々は、あまりにも「罪」や「死」を軽く見えていますし、そういう風潮があります。「罪」や「死」を無視し、考えないようにさえしています。どんなに時代が進み、人間の知恵や技術が発達しても、人は、罪と死を克服することはできません。二人集まればそこで様々な問題が起こり、争いや怒りが巻き起こります。それは心がけで克服できるものではありません。聖書の光によって、罪と死に正しく向き合うことがなければ、そこから救われることはないのです。イエスは人の罪の深さをよくご存知でした。それが人を神から引き離し、お互いの関係を壊し、世界に争いと荒廃をもたらすものであることを見ぬいておられました。罪こそ、「平和」、「平安」を壊すものなのです。また、「死」とは、たんに肉体が機能しなくなるのではなく、人が神から引き離されることであることも知っておられました。

だれでも自分の世界だけにいると、案外、自分のことが見えないものです。罪と死が支配する世界の中にどっぷりつかっていると、それが当たり前になってしまうのです。しかし、罪のないお方、いのちの主である神の御子には、罪と死の本質と現実がはっきりと見えていました。見えたからこそ、イエスは、そのことに「心を騒がせた」のです。「得体の知れないものに心を騒がせる私たち」と「得体の知れているものに心を騒がせる主イエス」と言える。

イエスが心を騒がせたのは、ご自分に迫ってくる罪と死の現実に対してだけではありませんでした。罪

と死から人々を救い出すという使命を思っただけのことでした。イエスが神の御子の力を発揮すれば、罪と死を根こそぎ滅ぼしてしまうことがお出来になったでしょう。しかし、それでは、それとともに人も世界も滅びてしまいます。それでイエスは、人を救い罪を消し去ること、人を生かし死を滅ぼすことを心騒がせながら求められました。そして、ご自分が人の罪を背負って、十字架の上で死ぬという道を歩まれたのです。

イエスは人の罪を背負って十字架にかかり、人が神のもとに帰ることができる道を開いてくださいました。かつては神の敵であった者が、神の子どもとして、神に受け入れられるようにしてくださいました。ほんとうの平安は、このイエスの救いから来るのです。

この世は、このような平安を与えることはできません。いくら生命保険を積んでも、もらえるのはお金だけで、永遠の命も、復活も決して手に入れることはできません。この世が与えるものは、たんなる「ひと時の安心」に過ぎません。ときには、根拠のない「気休め」でしかないときもあります。しかし、イエスがくださる「平安」は違います。それは、わたしたちに本物の安らぎを与え、わたしたちの人生を豊かにし、世界を平和に導くものです。「わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。」とイエスが言われたとおりです。

イエスは、ヨハネ 14:1 でも弟子たちに「あなたがたは心を騒がせてはなりません。」と言われました。そして、「わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったのでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」(ヨハネ 14:2-3)とおっしゃって、信じる者に永遠の住まいを約束されました。ここに決してなくなる平安があります。人は、神に立ち帰り、永遠の確かな保証を与えられて、はじめて、ほんとうの平安を得るのです。

ある人の文章に「恐れは許可なく心に忍び込み、無力感を与え、心の平和を奪う」とありました。ほんとうにそうです。平安だ、安心だと思っている日々であっても、許可なく、不安や恐れが突然襲ってくることもあるのです。それぐらい私たちの心は不安定で弱いものなのです。その不安や恐れは、言葉では表せない、自分でもよく理解できないものであるかもしれません。しかし、そんなときでも、キリストが与えてくださる平安がわたしたちを守ります。そして、それは、求める者に必ず与えられます。きょう、この日を、このキリストからの平安を、求め、受け取る、さいわいな日としようではありませんか。